



あぜがみ りゅうき
畔上 竜樹さん

つかだ ゆうた
塚田 佑太さん

いちむら こうじ
市村 浩司さん

岳南広域消防本部 ほふく救出 全国消防救助技術大会出場

6月17日に開催された「第37回長野消防技術大会」で見事優勝を果たし、「第47回全国消防救助技術大会」に出場が決まった、ほふく救出岳南チーム。8月24日に京都府で開催される全国大会へ向けた思いなどを聞きました。

ほ

ふく救出とは、火災の際に煙に巻かれた人を屋内から救出することを想定し、三人一組で行う種目です。空気ポンペを背負い、要救助者の元に行く1番員、誘導ロープと足巻ロープを扱う2番員、要救助者の3番員から編成されます。それぞれの動作を、安全性を保ちつつ短時間で終わらせる必要があるため、作業の確実性を訓練で高めています。

全国大会出場までの道のりは決して平坦ではありませんでした。私たちは2年前の県大会で敗れ、そのことをきっかけに、今までの訓練方法を見つめ直すことにしました。

全国の強豪チームの映像を集め、自分たちの劣る部分を研究し、訓練を繰り返す日々。昨年の全国大会を見学した際には「ここにいる人たちは、決して手の届かない存在ではない」と努力を重ねるうちに、確信できるとなりました。

私たち消防士は日々、管内の人を

助け、不安を取り除くため、業務を行っています。あってほしくはないことですが、災害の現場では、被害によって悲しむ人が少なからず出てしまいます。厳しい業務の中で「悲しむ人が出ず」、「周囲の人々を笑顔にできる」数少ない業務のひとつがこの救助大会です。自分たちの努力次第で、全国の救助隊員と己の実力、技術、体力を競い合えるこの大会は、とてもやりがいを感じます。

目標は日本一。日頃、指導をいただいている先輩に、最高の成績で恩返しをしたいです。また、訓練を通して得たものを、これからの救助業務へ生かしていきたいと思っています。

1 1番員の市村士長。10kgある空気ポンペを装着し、長さ8mの煙道内を検索。要救助者に向かう。

2 3 ひとつのミスがタイムに大きく影響する。正確に、素早く、日々の訓練が災害現場に生かされる。





File: 4



おいしい鶏肉には、理由があります。

今月の協力隊員 中村 栄介 隊員
問 地域振興課 ☎ 38-3111

プロの手加工

現在、私は北信州鶏加工所で鶏の解体技術の手ほどきを受けています。こちらの加工所は県内の平飼養鶏家から信頼が厚く、遠方からも解体の依頼を受注します。一般的なスーパーに並ぶブロイラーと言われる鶏は一切入って来ず、平飼いの鶏で、信州黄金シャモをはじめとする信濃鶏やフランス鴨などさまざまな鶏が入って来ます。

たまに解体の段階で残った細切れ肉を分けてもらえるのですが、この肉がまた“うまい”。なぜここまで違うのでしょうか？理由はさまざま。ブランド鶏だから？平飼いだから？餌が違うから？飼育期間が長いから？全部あてはまりますが「加工技術」も大きな要因です。

機械で解体され、うま味を失ってしまった肉と違い、プロの手加工では、肉を汚染させることなく的確に食肉のみの状態に加工し、本来のうま味を逃さないのです。



1

1_土の上で放し飼いにする「平飼い」で育てられた信州黄金シャモ。俊敏で姿も美しく、羽色は黄金に輝く。2_鶏肉本来の味を、今後どうやって皆さんに味わっていただけるか。搬入されたシャモを見つめながら、思案中。



2



池田市長の vol.55 わくわくレポート

ポテンシャルを生かした「職」の充実を図る

統計はやや古いですが、2016年では、中野市の事業所数は2,058、従業者数は18,204人である。2015年での産業別従業者数をみると、第一次産業で5,823人、第二次産業で5,757人、第三次産業で12,929人となっている。中野市の場合、医療関係従業者が多いことや、全国平均と比較し農業関係者が多いことが特徴である。言うまでもなく、住みやすく、暮らしやすいまちづくりは、職、住近接が一つの条件であり、そうした意味で、中野市は均衡の取れた産業構造であると言える。

地方創生は東京一極集中の是正と人口減少対策の二大柱となっているが、地方での暮らしを支える「職」の確保はこれからの地域における大きな課題であり、人口の偏在解消に向け大きな戦略でもある。

これからの中野市を考える場合、均衡ある産業構造と特徴を生かし、働く人を増やすことが、長期的



◀2019年度採用中野市職員募集ポスターを作成。職員がモデルとなり、職員の手によって作られている。

に安定したまちをつくる上で重要な課題。産業、企業や起業家の誘致などが取るべき戦術として大切だが、中野市の既存の産業構造などポテンシャルや特徴を生かした政策展開が必要である。

今、若者の人口減少により、就職環境が好転する中で、人材不足が生じているが、高度成長期とは異なり、就職にあたっての若い人たちの志向も変わってきている。ICTの普及が新たなビジネス環境をもたらし、実にさまざまなビジネスモデルが生まれてきている。こうした社会の質の転換を見据えて、地方でも起業や就業が可能な生活モデルも出現している。より豊かに、より人間らしく、自然のなかで新しいビジネスライフに挑戦できる場として、中野市のシティプロモーションを強力に進めることが今こそ大切だと思う。